審査の結果の要旨

氏名　藤森千尋

本論文は、中等教育段階の英語教育において、話し言葉が正確さ、流暢さ、複雑さの３観点からどのように熟達するのか、実際の高校英語授業場面でその学習がどのようになされているかの分析を、実験研究ならびに教室観察研究の両方法を用いて検討している。論文は、３部９章から構成されている。

第Ⅰ部第１章では、意味伝達としての単声機能と新たな意味生成としての対話機能というテクストの機能的二重性概念から先行研究を概括し、対話機能を捉えるために社会文化的アプローチにより相互作用分析を行う必要性を指摘し、個人・個人間・共同体の３分析水準からの分析方法を提示している。続く第２章では、話し言葉の学習が正確さ、流暢さの概念を中心に捉えられてきた点を指摘し、複雑さの概念に着目する必要性、教室場面の参加構造分析から話し言葉の学習の複雑さをとらえる意義を論じている。

第Ⅱ部第３章では単声機能に着目した実験研究を行っている。事前タスク課題として形式に焦点をあてた処遇群では流暢さと統語的複雑性が、また意味内容に焦点を当てた処遇群では流暢さと語彙的複雑さが統制群より高くなること(研究１)、英検３級レベル学習者では流暢さと複雑さに短期間の伸びがみられるが、正確さは英検２級レベル学習者水準に達した段階で伸びがみられること(研究２)、生徒の話し言葉に対する教師評価は正確さおよび、生徒相互による話す態度評価と相関がみられること(研究３)を明らかにしている。

続く第Ⅲ部では対話機能に焦点を当てた観察事例分析研究を行っている。第４章では先行研究から対話機能について、正確さとして修正発話、流暢さについて繰り返し発話、複雑さについて言い換え発話分析の視点を導出し、第５章では参加構造の異なる２自己表現授業比較から修正発話の質に相違が生じていること(研究４)、対話参加者数がより多い複雑な内容の対話場面において、意味共有のための繰り返し発話がより多く生起すること(研究５)、言い換え発話生起場面では，他者のことばを取り込み使用する複雑さを伴う学習が生じること(研究６)、主導者により対話の対称性の変化が生じること(研究７)を明らかにしている。第６章では、英文法授業から参加構造において教師の発言の相違が生徒の異なる言語知識の学習を導くこと（研究８）を示し、第７章では一斉学習と小集団学習の形態の差異が言語知識の学習に与える影響(研究９)を事例に基づき明らかにしている。そして終章では、本研究の総括と今後の課題と教授への示唆が論じられる。

本論文は、英語教育において従来十分には検討されてこなかった中等教育英語授業場面での話し言葉の学習過程の分析について、多様な概念と方法を用いて包括的に取り上げている。この点で独自性が高く、今後の中等教育段階の英語授業分析に対して新たな視座を提示した論文であると評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。